



国際大会で優勝したメンバー
(アメリカ・ロサンゼルスで開催)

世界の舞台で活躍!! 茨木市の姉妹都市と国際交流!!

茨木市バトントワリング協会ワールドウィングススポーツバトンクラブ

茨木市バトントワリング協会所属のワールドウィングススポーツバトンクラブは、昨年、国際大会メジャレット部門優勝、日本大会ジュニアバトントワリング部門4年連続優勝など、すばらしい活躍をされました。また、姉妹都市親善交流として、一昨年には安慶市（中国）、昨年にはミネアポリス市（アメリカ）を訪問されました。茨木市内でも幅広い活動を続けておられるチームの大機満恵コーチにお話を伺いました。

バトントワリング競技とはどのようなものですか？

バトントワリングはもともとアメリカからきたもので、パレードやお祭りでマーチングバンドの音楽に合わせてパフォーマンスをするものでしたが、近年、スポーツとして競技をするようにもなりました。個人戦、団体戦があり、小学生、中学生、高校生など年齢別で行う大会やフリーの大会があります。

競技には3つの要素があります。バトンが手から離れている時に何をしてどうキャッチするのか(エーリアル)、バトンを体の近くでどのように回し、また、指をどのように使って回すのか(コンタクトマテリアル)、手を使わないで肩や首でバトンをどのように扱うのか(ロール)に大別されます。そのほか、作品の構成、演技の正確さや同調性、音楽や衣装、観客へのアピールなども審査されます。

昨年は数々の大会で優勝されましたね。

昨年3月、アメリカ・ロサンゼルスで行われた国際大会に日本代表として出場し(高校生6人のチーム)、メジャレット部門で優勝することができました。7月には、日本大会メジャレット部門で優勝(高校生11人)、また9月には、ジャパンカップジュニア部門で4年連続の優勝を果たし(小学生)、東京都知事賞などを受賞しました。

選手はみんなしっかりと学校の勉強をし、練習にも欠かさず参加しています。大会へ出場するには、技術的なことはもちろんですが、小学生といえども、自分のことは自分でできることが重要になってきます。例えば、衣装を着る、髪をまとめる、化粧をする、また、遠くで開催され宿泊を伴う大会では、荷物をまとめて移動するといったことも一人でこなさなければなりません。しかし、全員がチームの一員だということを誇りに思って練習に励んでいます。自分自身に勝つことができこそ、本番でいい演技ができるのだと思います。



中国・万里の長城公演



クリスマス2008バトントワリング&ダンスショー
(生涯学習センターきらめきで開催)

安慶市やミネアポリス市での親善交流の様子 や茨木市内での活動について教えてください。

一昨年に訪問した中国・安慶市では、地元の劇団や雑技団との合同公演を満員の観客の中で行うことができました。昨年は、アメリカ・ミネアポリス市から市制150周年を祝う式典やパレードに出演依頼があり訪問しました。現地では市長を表敬訪問したり地元の中・高校生とも交流しました。

生徒たちはこのような経験やホームステイなどで文化や習慣の違いを知り、中にはもっとたくさんのことを学びたいと英語を勉強し留学する生徒も出てきています。国際感覚が身に付くよききっかけになっていると思います。

今年も、数々の大会を控えています。感動を与えられるような演技を目指しがんばりたいと思います。また、地元でのボランティア活動も昨年同様に行っていきたいと考えています。茨木市の施設や学校などで多くの方に私たちの演技を鑑賞していただけたらうれしいですね。

JICAの活動

JICA(独立行政法人国際協力機構)は、日本と発展途上国との架け橋となるべく、さまざまな支援活動を行っています。

JICAはどのような国際協力をするところなのでしょうか。茨木市の西部、箕面市との境界近くにあるJICA大阪を訪ね、実際に現地で支援活動をされた経験がある二人の職員にお話を伺いました。



世界の現状を伝えるパネルの展示

JICAとはどのような国際協力をしているところですか。

発展途上国には、貧困に起因するさまざまな問題に直面している国や地域があります。JICAはそれらの問題解決のために支援を行っています。支援は医療やインフラ(水、電気、交通などの社会・経済的基盤)、教育、農業、工業技術、パソコン技術など多岐にわたっています。

JICAはそれらの技術や知識を必要としている国や地域に専門家やボランティアを派遣しています。現在、青年海外協力隊などのボランティア約37,000人がアジアや中南米、アフリカなどで支援活動を行っています。彼らは現地の人といっしょに道路整備や水道敷設、農業などに取り組んでいます。

また、発展途上国の技術者や研究者を招いて研修をし、技術や知識を提供して、それぞれの国や地域の発展に活用してもらっています。これらの研修のために、自治体や大学、企業、研究所の協力をいただいています。さらに、その国の経済状況などに応じて、お金を融資したり援助をしたりしています。

JICA大阪には毎年、100か国以上から約800人の研修員が訪れ、3週間から3か月間、日本の社会や経済についての勉強をしたり、関西地域の中小企業、工場、博物館などに行き、知識や技術を教わります。例えば、滋賀県では水の環境など、京都府や奈良県では文化財保護や街の景観・観光産業など、大阪府では企業のしくみや工業技術など、和歌山県では養殖技術などについて研修しています。また、ここから近い国立民族学博物館で展示方法などを学ぶ研修員もいます。



各国の民芸品や絵画の展示



研修員に合わせたレストランメニュー

現地での支援活動について教えてください。

私たちは昨年まで現地に出向き支援活動を行ってきました。発展途上の国々のことは、本や映像などで知っているつもりでしたが、実際にその場に行って活動してみると問題の深刻さが肌で伝わってきます。私がJICAで国際協力の仕事をしようと思ったきっかけは、高校生の時に行った国で見た光景です。道路が整備されておらず町全体が埃っぽく、子どもたちが学校へも行かず道で物を売っていたりする姿を見て衝撃を受けたのです。自分が住んでいる世界とはまったく違う世界が目前にありました。その時、自分にできることは何かを考えました。ホンジュラスでの2年間の活動では、何とか現地の方に溶け込み仲良くなり、信頼関係を築きたいと努力しました。信頼関係があってこそスムーズな支援活動ができるからです。

研修員とJICA大阪近辺の方々との交流はあるのですか。

毎年8月に夏祭りを催し、研修員や近隣の人々と楽しい一時を過ごします。そこでは日本の文化と研修員の国々との文化交流が行われています(盆踊り、民謡、民族ダンス、民族衣装、料理など)。また、みんながいっしょに楽しめるゲームなどもします。どなたでも参加できますので、ぜひお越しください。また、研修員は関西地域の小・中学校を訪問して交流を深めています。子どもたちも研修員も心から楽しんでいるようです。

館内は研修員が和やかに過ごせるよう温かい雰囲気になっています。図書資料室にはたくさんの国際協力関係の本や資料があり、世界各国の民芸品や写真などが展示されたコーナーや世界の現状を知ることができる企画展示もありました。レストランではさまざまな国の研修員に合わせて、エスニックなど多種多様な料理が用意され、世界の食文化を垣間見た思いがしました。

館内の研修員に声をかけてみました。チュニジアから来られたこの方は、「もう3か月、ここで研修をしています。二酸化炭素を削減しクリーンな環境を整える技術を学んでいます」と、つたない英語での質問にもかかわらず、丁寧に答えていただきました。